

「托鉢とい行」

およそ2500年前に、お釈迦様は「托鉢」という「行」を考えました。

弟子たちと竹林で共同生活を送っていたお釈迦様は、ある日、弟子たちに

「明日から托鉢というものをやりたいと思う。みんなでお椀を持って托鉢に回ろう。だから、今日はどこかでお椀を手に入れよう」

と話しました。

翌朝、実際にみんなで回る前にお釈迦様はこう言いました。

「托鉢にはひとつだけ重要なポイントがある。

托鉢をする時に、お金持ちの家を回ってはいけません。貧しい人々の家を回って托鉢をしてきなさい」
弟子たちはとても驚きました。

「それは言い間違いですよ。何か別の考えごとでもなさっていたのでしょうか。

貧しい家を回ってはいけません。お金持ちの家を回りなさい。これが正解ですよ。」

間違っていたのではない。もう一度言う。お金持ちの家を回ってはいけません。貧しい人々の家を回って、托鉢をしてきなさい」

「なぜですか？ その理由を教えてください」

すると、お釈迦様はこう言ったのです。

「貧しい人々というのは、自分が貧しいので人に施しができないと思い、今まで施しをしてこなかった人々です。そのために苦しんでいる。その貧しさの苦海から救ってあげるために、あなたたちは托鉢に出向くのです」

「自分には施しをする力がないから、財力がないから、施しができない」

と生きてきた貧しい人々は、施しをしなかったがゆえに、実はお金が入ってこなかった。

「自分にゆとりがあったら、施しができるのに」

という思考回路は、宇宙の法則には当てはまらないようです。

駅前などで托鉢をしている僧侶をよく見かけます。鉢にお金を入れると、僧は「ありがとうございます」とは言いません。経文を唱えて、チリーンと鈴を鳴らして、合唱します。

それを見て「お金を上げて上げたのに、ありがとうの感謝の気持ちがないのか」と思うかもしれません。

本来は、自分が「ありがとうございました」と頭を下げるのが正しい作法です。

「私」のお金を正しく美しく使ってもらうために、生活に差し障りないお金を喜んで差し上げる。

その施しをすることで、どこからかご褒美をいただくというのが「喜捨」とはお釈迦様の教えです。

駅前などで托鉢をしている僧は、お金をもらうために立っているのではなく、もらってあげるために立っているのです。わざわざ私たちに施しをさせるために、出向いて下さっているのです。

こういった因果関係がわかると、こちらから「ありがとうございました」と言えるようになるでしょう。

お金が余っているから「喜捨」するのではなく、先に、生活に差し障りないお金や物品を差し出すと、それが喜ばれる形で使われた結果として、自分のところに返ってくるようになっていくらしい。

「ゆとりがあったら、施しができるのに」と思っている「ゆとりのない人」は、施しをしていないがゆえに、ゆとがないわけです。

投げかけたものは返ってきます。返ってくる時は倍返しです。愛情を投げかけると二倍の愛情が返ってきます。プラスもマイナスも必ず倍返しです。

<経営のヒント>

お釈迦様は人間関係を「縁起」と表現しました。「縁起」は仏教の根幹をなす思想です。

此れがあれば彼があり、此れがなければ彼がない。

此れが生ずれば彼が生じ、此れが滅すれば、彼が滅す。小部教典「自説経」

お釈迦様は、すべてのものは他のものとの縁によって起こる、因果関係によって起こると考えたのです。

「縁起」は「因縁生起」の略で、「因」が原因、「縁」は条件を指します。

自分を取り巻く現状は「自分の思い」で成り立っているのではなく、「自分が投げかけたものの因果関係」で成り立っている。

不機嫌を投げかけた人は、不機嫌にならざるを得ない出来ごとが返ってくる。

笑顔投げかけた人は、笑顔になるような出来事が返ってくる。

投げかけたものは返ってくる。投げかけないものは返らない。

それが宇宙の法則であり、お釈迦様の教えなのです。